

朝読書の時間に放送で 短い本の朗読(読み聞かせ)

図書委員会の活躍(取り組み)

ある日、男の子が学校から帰ってくるとテーブルの上にリンゴが一つ置いてありました。そして、そのリンゴを見かけた瞬間、ふと思うことがありました。

「……でも……もしかしたら これは りんごじゃないのかもしれない」男の子の「かもしれない」の妄想が膨らみ出す！もしかしたら——大きなサクランボの一粒かもしれない……中身はブドウゼリーなのかもしれない……剥いても剥いても皮しかないのかもしれない……メカがぎゅっ詰まっているのかもしれない……——男の子の妄想は、まだまだ続きます。

実は何かの卵なのかもしれない……育てると大きな家になるのかもしれない……宇宙から落ちてきた小さな星なのかもしれない……表面をよく見ると小さな宇宙人がいるかもしれない……このように『かもしれない』の妄想は膨らみ続け、さらにはこれまでとは違う方向に展開し始めます。

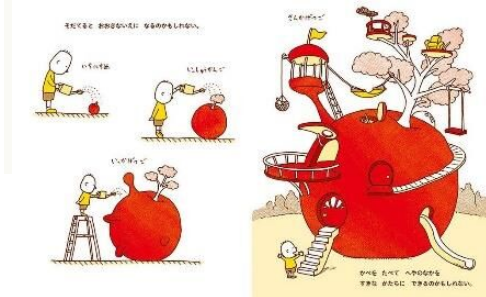
「そもそも なんで ここに あるんだろう。」そもそも——お母さんがスーパーで買ってきたのかもしれない……酔っぱらったお父さんがどこから持ってきたのかもしれない……何かの合図かもしれない……異なのかもしれない……男の子の妄想の行き着く先は！？「でも……もしかしたら……やっぱり ふつうの

りんごかもしれない……」これほど妄想を繰り広げたにも関わらず、男の子は誰と同じ発想に落ち着き、リンゴを手に取りました。それから匂いを嗅いでみたり、くすぐってみたり、見つめてみたり、最後は食べてみると……。

「かんがえる」ことを

果てしなく楽しめる

発想絵本



担当日	組	作品名	著者
12/3 (火)	Y・M Y・A	五分後に意外な結末	桃戸ハル
12/4 (水)	I・M K・Y	五分後に意外な結末	桃戸ハル
12/5 (木)	M・K F・K	りんごかもしれない	ヨシタケケンスケ
12/6 (金)	S・Y N・A	五分後に意外な結末	桃戸ハル
12/10(火)	N・M K・N	ふたりはきょうも	アーノルド・ローベル
12/12(木)	G・Y I・N	フランスの12の怖い昔話	大澤千加

アメリカの絵本作家、アーノルド・ローベル作。このシリーズをはじめとしてたくさんの絵本を描いている人気作家です。訳は詩人・作家の三木卓。5つの短篇物語を収録。登場するのは、いずれも親友同士のかえるくんとがまくん。絵本ですが、本書は絵よりもお話に主体があり、対象年齢はやや高めかと思えます。感じたことを素直に表現するがまくんと、がまくんの感じたことをそのまま受け止めて、付き合ってくれるかえるくんの物語です。自分の感じたことや思ったことを、素直に表現し合える関係性があるかないかは、その人の人生にとって大きな違いがあります。そういう相手がいるということ。それが「自由」ということ！ がまくんとかえるくんはその自由がとても大切だと教えてくれています。そして、自由にはセンスのいいユーモアが必要なのだということも……



後期読書月間
十二月二日(月)～
十二月十三日(金)

クラス対抗スタンプラリー 読んだ？

漫画 分類番号「9」の本 映画化された本

作者がカタカナの本 学級文庫の本

おすすめの本 絵本 おみくじの本

本を一冊読み終わった



フランソワ・マリー・リュゼルやアナートル・ル・ブラズなどによって19世紀から20世紀初頭にまとめられたフランスの民話の中から著者が面白いと思ったものを12編選び、再話した書。

『洗濯女の亡霊』『夜の招待客』『約束』『ノニクとガビック』『王の遺言』『マチュリーヌ』『幽霊城』『真夜中の糸紡ぎ』『蠅』『だまされた悪魔』『しゃれこうべ』『船長の指輪』

